

# 来館者が植物への興味関心を高めるエントランスアプローチづくり

## ～植物の展示方法の工夫を通じて～

大淀川学習館  
主幹兼業務係長 日高 謙次

大淀川学習館  
主任技師 園田 恵子

### 【要 約】

大淀川学習館（以下、当館とする）では、大淀川流域を中心に生息する多種多様な生き物を飼育展示している。しかし、植物に関しては館内「観察ステーション」に季節に合わせた展示と、「自然楽習園（チョウのへや）」での食草、蜜源植物の表示、それとエントランスアプローチ、杉の家周辺に表示があるのみとなっている。

本研究では、生き物と植物との繋がりを来館者に知ってもらおう場所を作ることで、植物への興味関心を高め、生き物と植物の繋がりを通して環境への意識を向上させられる場所を提供できると期待する。

### はじめに

当館は開館から約30年が経ち、数年前から館周辺樹木の巨木化、立ち枯れが目立つようになった。そこで、倒木の危険性がある樹木や、ケムシ等による来館者への健康被害が考えられる樹木を定期的に伐採あるいは強剪定してきた。ただし、伐採を行った場所は空間が空き、来館者を迎えるエントランスアプローチとしては寂しい感じを受けていた。

本研究では、エントランスアプローチを生き物が集まる場所にできないかと考え、生き物が集まる植物を植栽することで、来館者へ生き物と植物の繋がりを学べる場所を作ることを目的とし、研究を行うこととした。

## 第1章 植栽する植物と場所の選定

### 第1節 植物の選定

まず、植栽する植物を決める際に条件を、「①成長が遅い、もしくは低木 ②管理が難しくない、もしくは水切れ、高温、低温に強い ③季節感のある花期と昆虫が集まりやすい」の三つの点を考慮し、植物の種類を考えた。また、園田主任技師から、「できれば観察ステーションで過去展示したことのあるガの仲間のエサとなる植物や、チョウの食草も植えて欲しい。」との相談もあり、上記三つの点に「④鱗翅目の食草」も付け加え植栽する植物の選定を行った。

④を軸に考えると、過去に展示した生体でエサの確保が困難だったのは、キンモクセイ、ミモザ、アシタバがある。

まず、キンモクセイはイボタガの幼虫が葉を食べるのだが、当館には植栽されていなく、職員の自宅から分けてもらっていた。次にミモザだが、キタキチョウの幼虫が葉を食べるのでチョウのへやで植栽されているが、採卵用に利用しているため、枝を切ることができず、エサとして利用する際は筆者の自宅から持参していた。最後にアシタバだが、キアゲハの食草で当館ではチョウのへや、第一食草園、事務所裏と植栽されているが、キアゲハの幼虫は大食漢で、例年アシタバの葉が不足し、野外でノダケやシラネセンキュウといった食草を確保していた。

この三種の植物を軸に、他の植物も候補（表1）にあげ場所を決めることにした。

表1. 植栽候補植物と、観察が期待できる生き物

	植物名	観察が期待できる生き物
1	キンモクセイ	イボタガ
2	ミモザ	キタキチョウ、ミノムシの仲間
3	アシタバ	キアゲハ
4	ナノハナ	モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ツマキチョウ、ミツバチなどのハチの仲間
5	ハナナ	モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ツマキチョウ、ミツバチなどのハチの仲間
6	フジバカマ	アサギマダラ
7	コクサギ	カラスアゲハ
8	ギョボク	ツマベニチョウ
9	シロツメグサ	モンキチョウ、花にはミツバチなどのハチの仲間
10	ユリの仲間	ルリタテハ、花にはアゲハ類
11	キジョラン	アサギマダラ、ホソツツリンゴカミキリ
12	ミカンの仲間	アゲハ、ナガサキアゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ
13	ブッドレア	蜜源植物（花に集まる様々な種類の昆虫）
14	デュランタ	蜜源植物（花に集まる様々な種類の昆虫）
15	スイセン等球根	来館者に季節を感じてもらう

その他にも、マメ科やナス科などの野菜を植栽し、自分たちが食べている野菜がどのように実っているのかを観察できるようにする。

## 第2節 場所の選定

まず植栽予定の植物でキンモクセイが成長も早く、大型化するので最初に場所を決めた。場所としては管理もしやすく、もし大型化しても来館者や建物への被害が少ない正面出入口近く（写真1）を選んだ。次にミモザも成長が早く、倒木しやすいことから、来館者への影響が少ない場所（写真2）を選んだ。最後にアシタバは、霜に当たると弱ってしまうことから、常緑樹の根元付近を探し、タブノキの下（写真3）に植えることとした。

その他のナノハナなどは、日当たり等、生育条件に合った場所に植栽した。また、地植えにすることが難しい植物はプランターに植栽し、エントランスアプローチ沿いに並べることにした。



写真1 キンモクセイ



写真2 ミモザ



写真3 アシタバ

## 第2章 植栽

### 第1節 土づくり

エントランスアプローチの土の部分は固く、掘ってもすぐに石や根が出てきて、10cm掘るのも一苦労である。ここにそのまま植栽をしても、植物が根付くには厳しいと考え、植栽する場所の土づくりを行った。しかし、上記にあるようにあまりにも土が固く掘ろうにも、ほとんどの場所はまともに掘ることができなかった。そこで園田主任技師と相談し、盛土での簡易な花壇で植栽できるのではと考えた。盛土にする土は、市販されている培養土と腐葉土を混ぜたものを使用することとした。

### 第2節 花壇づくり

溝を作り、そこにブロックを立てる方法で簡素ではあるが花壇を作ることとした。それでも溝を掘るにはなかなか骨が折れる作業で、とてもではないが広範囲での花壇作りは厳しいと判断し、約1m四方のマス（写真4.5）を基準に作業を進めた。

また、花壇を作るには厳しい場所では、土留めとしてブロック（写真6）を設置し、土の流出を抑えるために、グランドカバーを期待しシロツメグサの種を蒔いた。



写真4 アシタバの花壇

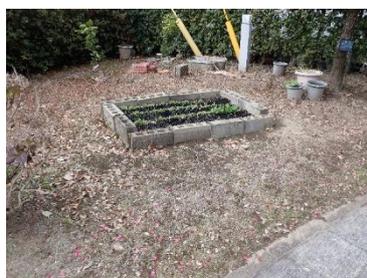


写真5 ナノハナの花壇



写真6 ブロックでの土留め

## 第3章 生き物との繋がりを観察する工夫と課題

### 第1節 生き物の種類に分けた区画作り

エントランスアプローチ沿いに選定した植物を漠然と植えても、来館者が観察し辛いと感じ、区画ごとに分けて植栽することとした。

例えば、フジバカマを植栽した（写真7）近くにキジョランを植え、アサギマダラを観察できる区画や、ミモザを植栽した近くにメドハギを植え、キタキチョウが観察できる区画といったように作っていった。



写真7 フジバカマ

花壇以外の区画は、土壌の特性上チガヤが優勢種として繁茂しており、チガヤは雑草として厄介者扱いされがちだが、他の植物が繁茂しにくいことや、トノサマバッタやショウリョウバッタなどの直翅目の昆虫が集まることから、除去せずそのまま残すこととした。

### 第2節 課題

ある程度の植栽できる環境づくりを行うことができたが、一部の植物は根が張るまでの期間、寒さに弱いため本研究中に植栽することができなかった。また、本文中に記載しているように、エントランスアプローチ沿いの土壌があまりにも地植えに適していないため、植栽した植物がしっかりと定着するかは来年度にならないと分からない。このことから植栽された植物の生育が確認されてから、表示をすることが望ましいと考えた。

### おわりに

今回の研究で、エントランスアプローチを活用した植物と生き物の繋がりを来館者に知ってもらえる足がかりが完成した。表1で選定した植物のほとんどを植えることもでき、時期が合わなかった植物についても、苗、種子での確保はできたことから、今後も小規模ずつ可能な限り植栽する範囲を広げていき、植物と生き物の繋がりを表示していくことで、エントランスアプローチが華やかになり来館者への学びの場になってゆくのではないかと考えられる。また、チョウの食草を植栽したことで、飼育担当者の負担を減らすことができ、さらに除草範囲を狭くすることで委託費減にも繋がった。

これからも持続していくためには、水撒き等職員の協力が必要にはなるが、あまり負担が増えない様に植栽管理を進めていきたいと考えている。

最後に、花壇作り等で協力していただいた柳田主任学習指導員に感謝申し上げます。